World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第38回

日本　魅力ある四国の旅にストーリーを

須賀（すが）　努（つとむ）
コラムニスト・アジアンウオッチャー

筆者は４年前からアジアをほっつき歩いているが、２年前から時々日本国内も歩くようになった。その理由はひとえに円安。それまでは日本の国内旅行は高いとの先入観があり、事実新幹線やタクシーはアジア目線からするととても高いのだが、最近の円安によって様々な物がかなり割安に見えるようになっている。その感覚は中国人や台湾人、香港人に近いと感じるところがあり、大挙して日本に来る彼らの気持ちは良く分かる。

今回は先日訪れた四国での体験をもとに、“半外国人”目線で見た新たな日本の旅をご紹介したい。ゴールデンルートといわれる東京、大阪、京都、広島などとは一味違う日本の旅の魅力創出に期待している。

LCC 効果

日本の旅が割安に思えるようになった最大の理由、それは格安航空会社（LCC）の日本参入であろう。それまでは東京から四国や九州に行くにはかなりの資金が必要で、節約するにしても深夜バスを使うしかなかったが、現在では多数の LCC が参入し、競争原理も働いている。

今回は成田－高松の片道を買ったが、この路線には外資系 LCC が２社も参入しており、驚いた。そしてキャンペーンのタイミングに購入すると、2,980円でチケットが手に入った。もし東京から新幹線と特急を乗り継ぐと20,000円以上はかかる。実際予定が変更になり、高松空港から愛媛県に移動したところ、空港バスと JR で3,000円を越えてしまった。これが今の日本の国内交通運賃の現状である。機内には中国人など外国人もちらほら乗っていたが、大半は日本人の観光客。LCC の効果は円安と相俟って、国内旅行をも着実に押し上げている面がある。

因みに高松空港から JR 坂出駅までリムジンバスに乗ったが、フライトの空港着が12時、バスの出発予定時刻が12時15分とギリギリで冷や冷やした。ところが『最大15分はお待ちします』との表示が小さく出ていて、実際に乗客全員がターンテーブルから荷物を取って乗り込んだ後、12時半近くの出発となった。もしこれに乗れないと１時間以上次のバスを待つことになるので、しっかりした告知をするべきだ。外国人の個人客には特にこの辺のケアが十分できているのかがとても不安になる。

お遍路さんの道

四国の旅といえば、やはり四国八十八箇所の札所を回る「お遍路さん」が有名。愛媛県では今治にある札所になっているお寺に宿泊したが、かなり山の中に入る感じで神秘的だ。ここは宿坊に温泉まで付いていた。自然に囲まれた環境も抜群であり、食事も地元の野菜などを使ったあっさりした料理が中心。朝は６時から勤行に参加することもでき、仏教に興味のある台湾人、タイ人などアジア人には是非勧めたい場所。お遍路さんとして回るのは大変かもしれないが、観光の一環と考えれば非常に良い資源が揃っている。

地元の人に聞くと、お遍路さんの中には欧米人も時々見られるそうだが、アジア人はあまり見かけな

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

いという。『御接待』としてお遍路さんに茶菓や食事などをふるまったり、宿を提供したりする習慣は、日本人にも仏教の価値を再認識させてくれるほか、外国人に日本の良さを実感させる機会になるだろう。この『遍路道』をもう少しアピールすると同時に、仏教について外国語で語れる人材を育てる必要を痛感する。

連日温泉に入り

四国を巡る途中、日々良質の温泉に浸かることができたのは実に幸せなことであった。正直、世界中の旅人で、日本人ほど風呂にこだわる人々はいない。海外のホテル予約サイトのコメント欄を見ると『熱い湯が出なかった』『バスタブが汚かった』など、風呂に関するコメントが実に多い。

逆に言えば、外国人は『シャワーを浴びられればOK』という人も多く、入浴の習慣に不慣れな人も多い。勿論日本に来る外国人はある程度日本の習慣を勉強してくるが、温泉の効能や入浴が健康に与える影響などをもう少し外国語で知らせる努力が必要ではないだろうか。現在アジアでは健康志向が高まっており、彼らのニーズにマッチすると考えられる。

愛媛県の霧の森ロッジに宿泊したが、大自然の中で過ごせる環境が抜群で、温泉だけでなく、夏はきれいな川での水遊びを楽しむことも、ロッジに宿泊もできる。更には日本茶を楽しめるカフェなども併設されており、多様な外国人ニーズを取り込むことができることから、ぜひ外国人にも紹介してもらいたい。

写真１　霧の森ロッジのカフェ

農家民泊が面白い

今回の旅で一番驚いたのは、徳島で体験した農家民泊。予約して当日行くと、『忙しいので勝手に入って。鍵は開いている』と言われ、勝手に他人の家に上がり込む感覚。室内は以前誰かが住んでいたそのまま。エアコンなどはなく、囲炉裏や石油ストーブが懐かしい。現代の若者は石油ストーブなど点けたこともなく、我々の年代でもストーブ１つに点けるのにドキドキして楽しかった。

写真２　農家民泊　囲炉裏を囲む朝食

冬の夜は囲炉裏に鍋を掛けて食事ができるという。どてらも用意されて気分が高まる。朝は早くに管理人が来て、台所で料理を作り、暖かいボリュームたっぷりの朝食を提供してくれた。日本のちょっと昔の生活を体験してもらう、農家の空き家を活用した農家民泊は外国人向けにも積極的に活用できる、と確信した。

『日本の旅にはストーリー性がない』と以前出会った中国人ブロガーの言葉を思い出す。四国は県や市町村毎での観光客対応ではなく、『遍路』『農家』『温泉』などのストーリーを作って一体として売り出した方が、外国人には分かりやすいのではないだろうか。